

大阪学院大学 経営学部  
教授 松山壽一

### 西欧近代におけるアカデミーと大学の歴史と本質

今日われわれが抱いている大学に対するイメージは、1810 年に創立された新しいタイプの大学すなわち教育と研究とを一体化した高等教育機関としての大学によって形成されたものであり、このイメージがそれ以前の古いタイプの大学にまで持ち込まれると、ミスリーディングな議論がなされることになる。たとえば、啓蒙の世紀（18 世紀）に活躍したドイツの哲学者カントの偉業を、彼が東プロイセンのケーニヒスベルク大学で学び、かつ同大学の教授を務めたことと結びつけることなどが、その最たる例の一つである。当時、同大学は旧態然たる教育機関にすぎず、こうした大学に信頼をおけなかった当時のプロイセンのフリードリヒ大王はベルリンに存在したアカデミー（1700 年創立）を刷新し（1740 年）、それによって自国の科学学問振興を図った。カントはプロイセン・ベルリンにおけるこうした動向を東プロイセンから見やりながら、自身の研究を遂行した。彼の哲学の偉業を歴史的背景、環境から解釈しようとする場合、こうした旧態然たる教育機関としての大学 vs. いわば先端科学・学問の研究機関としてのアカデミーという当時の対抗状況を歴史的に説明しなければならない。

松山はカント初期の自然哲学を解釈・理解するために、上記の状況を歴史的に掘り起し、新たなカント解釈を提唱した（2000 年、岩波書店刊行のカント全集第一巻総解説ならびに 2003 年、北樹出版刊行の拙著『若きカントの力学観』）。本学に研究助成を申請し、研究を進めようとした目的は、こうした試みを、カント（18 世紀ドイツ）に留めず、他の哲学者、科学者および他の領域に広めることにあった。研究助成申請により、今回、2008 年 4 月より 2011 年 3 月までの三年間にわたる助成を受け、それによって、この間、西欧における大学とアカデミーの歴史に関する資料収集と現地調査を行ったが、研究成果の報告としては未だ紀要論文一篇に留まっている。アカデミーの草創期の 17 世紀におけるイタリアでのアカデミー vs. 大学の状況、環境に、いわゆる近代科学のパイオニアの一人ガリレオの活動を位置づけた前掲「ガリレオにおける大学とアカデミー」である。今後の研究成果報告として、イギリスのニュートンの場合に加え、ドイツのカントの場合を再論することで、17～18 世紀における大学とアカデミーとの対抗状況をイタリア、イギリス、ドイツという西欧の近代科学、近代哲学の成立、展開の主舞台において歴史的に跡付ける予定である。